

新ひだか町二十間道路桜並木の樹勢回復措置・その5

1 はじめに

2022年（令和4年）11月8日から11月9日まで、新ひだか町の二十間道路桜並木の「花のトンネル」の入口付近の大山桜計9本を対象に、樹勢回復措置を行いました。「花のトンネル」は、二十間道路の支線にあたる大山桜の並木道で、二十間道路とは違って、道の狭さによって対照的に桜並木の美しさを演出しています。この並木の横にある広場では、「しずない桜まつり」期間中、露店が並び、多くの花見客が集まるメイン会場となっています。



花のトンネル 2017.05.08 金田正弘氏撮影

2 樹勢回復措置

樹勢回復措置は、これまでと同様に土壌改良を主としています。作業の参加者は、樹木医金田正弘氏、御子息の金田紘幸氏、(株)環境整備公社の不動祐樹氏、館山一樹氏、当社樹木医木戸口和裕の計5名で行いました。

今回、9本中5本の桜は、百年を超える桜と推定され、その他の4本は若い桜です。また、9本中7本は、割竹縦穴式土壌改良法又は縦穴式土壌改良法を既に実施済みで、その内訳は、2019年（令和元年）11月18日から19日までに実施したものは3本、2020年6月18日から19日までに実施したものは4本、となっています。従って、今回、新たに行ったものは2本です。

今回の措置の約2カ月前の2022年9月9日に、現地確認したところ、これまでの土壌改良の効果を顕著に示す樹勢のものとうでないものがありました。

2019年の11月施工の例として、次の写真の桜は、百年を超すと思われる桜ですが、胴吹きが多く見られ、葉量も多くなり、葉色は緑が濃くなっていました。



2019年11月施工の個体 2022.09.09



今回の措置完了後の同個体 2022.11.09

一方、2020年の6月施工の比較的若い桜は、胴吹きは見られず、葉量も少なく、9月上旬にもかかわらず、紅葉が始

まっている状態でした。



2020年6月施工の個体 2022.09.09



今回の措置完了後の同個体 2022.11.09

これまでの施工効果の観察結果も踏まえて考えると、新生枝の展開や花芽形成時期となる6月に、アースオーガによる縦穴掘削を内容とする土壌改良を行うことは、樹体の糖分量の減少に拍車をかけて、樹体への負担が大きく、細根の発達に時間を要する結果となっているのではないかと考えられます。この仮説に基づき、アースオーガを使用した土壌改良は2020年を最後に、秋季の実施を心がけているところです。

土壌改良用の縦穴への充填材を「混合土」と称していますが、その内訳は、①固形のフルボ酸の植物活性剤「フジミン Forest」、②稚内珪藻土、③DWファイバー（木材チップを特殊解繊処理した上、フルボ酸の植物活性剤「フジミン」を添加したもの）、④燻炭（東南アジア製）、⑤ピートモス、⑥新ひだか町産堆肥、⑦樽前火山灰、⑧鹿沼土、⑨赤玉土、です。これらは全て金田樹木医が用意したものです。

このうち、④燻炭は、道内産のもみ殻燻炭が入手できなかったため、代替品として東南アジア製を購入したとのことです。ウクライナ戦争により化学肥料の高騰は、土壌改良材の購入にも影響を与えているのかもしれませんが。

次の手順で措置を実施しました。

- (1) アースオーガによる割竹縦穴式土壌改良法又は縦穴式土壌改良法で、上記「混合土」を投入
- (2) 穴あけ器でエアレーション
- (3) フジミン Forest、普通化成肥料を微量、縦穴の表層部にのみ散布

金田樹木医は、割竹縦穴式土壌改良法を実施すると、土壌が柔らかくなり、土壌改良効果が高いと実感し、今回は50本を超える割竹を準備していました。根の分布域に環状に一重、または二重に縦穴掘削し、その掘削数は個体によってまちまちとなりますが、準備した割竹を全て使い切りました。2019年、2020年、既に実施済みの計7本の桜については、既設の縦穴と縦穴の中間的な位置にさらに縦穴を掘削するため、高密度施工を行っていることとなります。



混合土の作成 2022.11.08



アースオーガによる縦穴掘削 2022.11.08



混合土の投入

2022.11.08



割竹表層部のフジミン Forest 2022.11.08

2019年、2020年に既に縦穴を施工済みの桜の細根分布域を、今回、アースオーガで縦穴掘削したところ、前回よりも土が柔らかくなっているという、まさに「手ごたえ」があり、掘削中のキックバックも極めて少ないものでした。縦穴式の土壌改良法は、根の領域となる土を立体的に土壌化し、ミミズや土壌微生物の活躍の場を増やしていることは確実にあると思われました。

3 おわりに



二十間道路桜並木

2018.05.01 金田正弘氏撮影

二十間道路桜並木の桜は、1916年（大正5年）からの3年間、宮内省の御料牧場の職員が近隣の山から、オオヤマザクラ（エゾヤマザクラ）やカスミザクラなどを移植したのがはじまり、つまり「創業」となっています。

「二十間道路」自体は、宮内省の御料牧場の行啓道路として造成されており、この桜並木には、今日の軽種馬生産につながる歴史が寄り添っており、百年以上の星霜を経た老齢の桜は、いわば歴史の生き証人です。

この歴史の生き証人の咲かす花が、観光客の「センス オブ ワンダー」（自然に触れて深く感動する感性）を大きく刺激し、このことがこの桜並木の魅力の本質ではないかと思われまます。

百年を越す桜は、内部腐朽が進み、「もう」だめだという桜も確かにあるかもしれませんが、多くが「まだ」まだ美しい花を咲かせるという潜在力があると思っています。それを引き出しことが、この桜並木の「守成」の一つであると思われまます。

今回の措置は、2023年（令和5年）夏の花芽形成に役立ち、2024年（令和6年）以降の花の開花にきっと良い結果をもたらしていくものと考えており、注視してまいりたい。